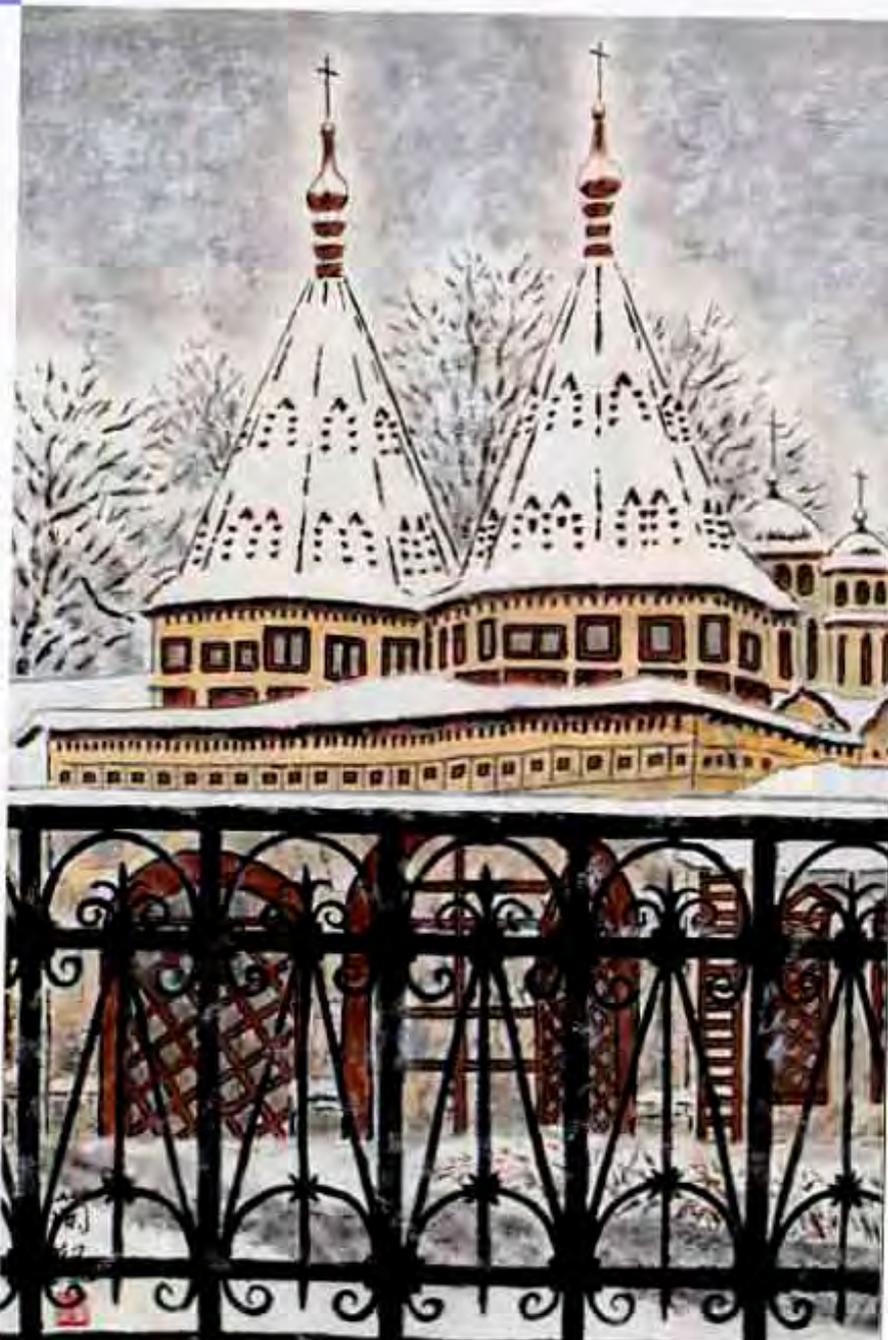


冲

3
2017

创刊号(2015)



花甘藍

能村 研三

葛飾八幡宮三十三年祭

八幡の杜に弦音や蝉しぐれ

和夫

東山魁夷夫人逝く

画家の妻逝く小虎魁夷の山眠る

春淡し投網一円光なす

厄年の埒外にゐて春寒し

花甘藍色よく茹でて山に雪

今年の手児奈文学賞の大賞となった館山の石崎和夫さんの句である。これは、私の産土神である葛飾八幡宮にできた弓道場清明館を詠んだもので、弓道の段位を持つ腕前の方ならではの句である。

この弓道場は葛飾八幡宮が今年四月に三十三年式年大祭が行われる記念に造られたもので、弓道場の他にも境内が綺麗に整備され、旧市民会館が新たに「八幡市民会館」としてオープンする。

式年大祭は、決められた期間ごとに行われる祭祀のことで、昨年見に行くことができた諏訪大社の御柱や、伊勢神宮、出雲大社の式年遷宮などが一般的に知られている。葛飾八幡宮は三十三年を式年としてお

余寒顔曲名思ひ出せぬまま

「原人」七十周年

引き成りの九十九里浜初日敲つ

「門」三十周年

同門の縁尊きふくさ藁

栗原公子句集『銀の笛』

横笛に銀の響きや春を待つ

峰崎成規句集『銀河の一滴』

淑気かな地擦り抛りの江戸神輿

七種年男句集『輪中の空』

結び地を栖としたる若菜の野

り、二十三年前の昭和五十九年には、三人の我が家の娘も幼く、三人とも化粧をして稚児行列に参加したことが記憶に残っている。

私が生まれた所が葛飾八幡宮に近かったので、私も幼い頃はここが毎日の遊び場で、小高い裏山などは馴染み深い所だったが、それが富士塚の祠がある由緒ある所と知って驚いた。

俳人協会の花と緑の吟行会は昨年引き続き続いて「沖」が幹事役を引き受けているが、今年は吟行地が八幡界隈であるので、式年大祭の直後の八幡宮を案内することができることを楽しみにしている。

能村 研三



蒼茫集



最前線

辻美奈子

* 冨の最前線のワルキューレ

きりきりと髪の根太し初稽古
あやとりの小指に役のよく回る
乗初のままかのジェットコースター
懐かしくひとと会うたる初仕事
人日のシンバル空気割るごとく

鯉起し

広渡敬雄

松手入青々と葉を散らしけり

* 一本の冬木を父と思ひけり
蜜さぐる冬蜂の口鋼なす
封筒の中に空気が年の暮

鯉起し応挙の龍をたぢろがす
手を上ぐる赤子の空や初明り

七草草子

矢崎すみ子

* 光年を星は眠らず冬木の芽

省略の身じろぎもせず蓮の骨
走り根に冬麗の彩遊びけり
湖の波は光に菊枯るる
七草を数ふ『七草草子』かな
築山に松の一樹や寒の月

断崖

荒井千佐代

命がけで生くる仮の世つたもみぢ

冬の葬遺影へ絵硝子色の日矢
淋しければ猫も舐め合ふ石路日和
石二百積んでルルドや冬たんぽぽ
磔像は膝すこし曲げ冬日和
*身の裡に断崖のあり雪しんしん

姿 見 安居正浩

年忘れついでに齡忘れけり
遠き世もすでに近き世去年今年
*姿見に全身のある寒さかな
葛湯吹く昭和忘るるやうに吹く
四日はや急降下する心意気
箸の先緑に染めて七日粥

不機嫌な貌 池田 崇

孫ひこと手心のなき歌留多とり
金婚のことにも触れて屠蘇祝ふ
寒鼻自分扱置く妻であり
雪吊の一景として仕上げらる

大寒や老いの脆さの爪を切る
*雪搔きに出る不機嫌な貌ばかり

大海原 細川洋子

鯨啼く大海原は寂しいか
寒卵あけぼの色のこころざし
冬至湯の柚子懐つくく寄つて来る
獅子舞や忘れ形見の女の子
*筋金といふは銀色冬の川
仲見世通り裏の丹色や初観音

煮干の目 林昭太郎

軋みつつ太陽わたる枯蓮田
綿虫や潮鳴り鳴りを潜むれば
葱深く伏せて世情に疎くをり
*凧や抜け落ちてゐる煮干の目
春を待つ赤き目盛の哺乳瓶
梅二月ひかりは風に先駆けて

七十年

楠原幹子

七十年 戦なき国 鏡餅

虎落笛見えざるものに急かされて
日向ぼこ片意地いつの間にか失せ
積もりゆく落葉や軽くなる記憶
波荒きことも肴よ爛熱し

* 裸木のあつけらかなとして威風

雛の間 小野寿子

三寒四温ひかりとなつて鳩去りぬ
* いくさあるな春の星座を繋ぎつつ
はるかなるもの貴しや山笑ふ
五人官女太鼓の撥を失せしとは
くろぐろとある御ん髪のお雛
雛の間の軸は晶子の恋の歌

丸くなる 宮内とし子

ストロブ列車人もするめも丸くなる

顔見世や間よき掛け声「成駒屋」

反骨の男も老いて冬至風呂
* ふるさとを捨て故郷の雑煮椀
滝凍てて水なることを忘れをり
雪吊に石灯籠の畏まる

酉年 森岡正作

大いなる惰性のはじめ日記買ふ
大噓して一年を脱ぎにけり
酉年の初富士八重に羽開く
* ヘップバーンの王女のやうに白鳥来
冬旨し能登の魚の甘辛煮
女正月風呂が沸いたと風呂の言ふ

北の藻塩 甲州千草

あらたまの音にて動き出す車
手を振れば風の生まるる寒さかな

*寒波来る北の藻塩で締める味
雪降りワインの栓を抜く間にも
霜の芝鳥の歩みの光りをり
鳥触るる度に沈みぬ枯蓮

深霜 吉田政江

*タイヤ交換まだかかりさう袖子を挽ぐ
潮鳴りの底伝ひくる冬の能登
沼鳥の褥の跡よ冬弱日
白鳥のナルシスの首水に映ゆ
深霜を踏み靴底の高さかな
鈴紐の真新しきや初大師

くねくねと 内山照久

綿虫や晩年の時刻み急
*くねくねと見えてこりこり海鼠かな
湯豆腐の湯気の向かうの万太郎
雪だるま星の軌跡を追うて明け

裸木の開き直りの眩しかり
星一つ従へ月の凍てにけり

浮寝鳥 鈴木良戈

朝の日の水尾濃く引きて浮寝鳥
昼時に来て朱欒売り良くしやべり
懐旧や煮詰つてゐし河豚汁
難しき嬰の名前や梅ふふむ
人参を洗ふ馬頭観世音碑
冬日濃し数多の馬の命日に

元日 大畑善昭

計が鳥のやうに飛び込み大晦日
歳晩の星がびつしり死者の家
縹色より徐々にして初茜
元日の山河ぴかぴか佳き世たれ
これがわが八十の顔初鏡
水使ひつつ輝をなげく妻

潮鳴集



あたたむる

篠藤千佳子

* 北窓を塞ぎ牛乳あたたむる
筋書を書き換へてゐる聖夜かな
続々と枯野へ向かふヘルメツト
分け入つてゆふぐれ近し雪蚩
小春日の増やしてゆける可動域

暮れ泥む

菊川俊朗

* 暮れ泥むとは白鳥の白のこと
湖水る風の道筋ありありと
一月のどこへも行かぬ山河あり
一語もて一語に応ふ冬田道
全集は最後に捨てむ冬の蠅

ナポレオン帽

菊地光子

* 仁丹のナポレオン帽雪来るか
菰巻の 一列潮の香をまとひ
風花やみどり真如の通ひ路
茶の花のほろりほろりと野面積
せせらぎを跨ぐ木の橋冬紅葉

寒 卵

大矢恒彦

* 寒風がベンチのかたちして座る
マフラーの顔略式となりにけり
甘樫の丘より三山冬日和
寒卵こつんと朝の動き出す
宇宙より音ありとせば霜の声

奥能登

七種年男

*野水仙開けつばなしの海がある
 ことさらに冬の奥能登うしほ濃し
 海といふ水の器よ大鯨
 侘助の翳を培養してゐたる
 曙光に白鳥の声染まりけり

ひたひたと

内山花葉

焼ぎんなん食めば晩節なる甘み
 来迎柱の残響賜ふ大旦
 寒波来るゾーリンゲンの刃のやうに
 *雪をんな悪女ぶつても猫舌で
 ひたひたと地球溺るる解氷期

ローム層

峰崎成規

*冬早風の音積むローム層
 綿虫の雲からちぎれ雲へ消ゆ

寒月光縦の葉先をさらに削ぎ
 息凝らし寒の底這ふ塗師の篋
 丹田は動かざる芯筆始

大 噓

大沼遊魚

鷓鴣にも鴻鵠の志
 焚火して燻製色の顔と貌
 *火を消されストーブ少し縮みたる
 深会釈享けてマスクを外しけり
 恋風を吹き飛ばしたる大噓

渡し舟

諸岡和子

*なまはげに父おとうはいつも宥め役
 むぐつちよや想定外といふ遊び
 望郷の煮つまつてゐるきりたんぼ
 自転車と乗りて恵方へ渡し舟
 ちやんちゃんこ着せられてゐる帰郷かな

飛鷹選評



能村 研三

生きて今日冬青草の戦ぎけり 岡本 秀子

冬の寒さにあって、荒涼とした風景の中でただ耐えているだけでなく、冬でも青々としている草を見ると、心も目も奪われて何か勇気づけられる。風に戦ぐ冬青草はいたいだけで、凛とした風情がまざまざと目に浮かぶ。自然の中で雑草のもつ逞しい生命力は私たちにも力を与えてくれる。

雪吊に手持ち無沙汰といふ緩み 須田 千代

北陸など多くの雪が降るところは、雪が重くて粘り気があると折れたりするので、庭木などを守るため雪吊をして枝などを守る。造形的で幾何学的な線形は美しく、冬の風物詩として親しまれている。しかし、雪が少ない年はそれも空振りとなってしまう。雪吊を擬人化した諧謔性が面白い。

初雪の齡ひとつを連れて来し 木村 美翠

木村さんの故郷は長野。冬の間雪に閉ざされた生活を送る人

たちにとつては、初めて降る雪に情緒ばかりを感じてはもらえない。屋根の雪おろしや雪掻きなど、一定の覚悟が必要となつてくる。年々齡を重ねていけば、それだけ体力が衰えてくるもので、初雪に合う度に齡というものを意識するようになった。

朔風や藍色深む能登の海 榎本 秀治

朔風とは北風のことだが、七十二候の「朔風弘葉」「冷たい北風が木の葉を散らす頃」の意である。この句はあえて同じ意味でも「北風」としないで「朔風」という言葉を使ったことで、格調高いイメージに引き上げた。北陸勉強会で実際見た風景に思いを寄せながら能登の冬の波の色を想像した。

鰯起し五感揺さぶる 日本海 西村 渾

前句と同様、日本海のを詠んだ句である。「鰯起し」は北陸などで、鰯漁が始まり本格化する十二月から一月頃の雷を言うが、豊漁の前兆として喜ばれている。夏の雷とは違って、一つの雷が大音量で正に五感を揺さぶるような迫力である。

トルソーのごとく伐られて大枯木 清部 祥子

トルソーは「胴体部分のみを造形した彫刻」あるいは「枝のない木の幹」のことを言うが、ここでは枝をことごとく伐り落とされた太い丸太のようなものを連想すればよいのだろう。いづれにせよ、トルソーという言葉は何か詩情をかきたてる。(以下略)

沖作品



能村研三選

* 糶果てのト口箱積もる寒さかな
生きて今日冬青草の戦ぎけり

一筋の早瀬の音や冬河原
切り干しの眠たき色の水を切る
散るままに散り敷くままに谷紅葉

* 雪吊に手持ち無沙汰といふ緩み
襟巻の狐うなじを甘噛みす
除雪車の音に目覚むる真夜の宿
雲間より海へ射す日矢寒に入る
足らなくも過ぎててもをらず寒椿

* 初雪の齢ひとつを連れて来し
ナツプザックに葱突つ立てて男過ぐ
ずく出して母にならひの去年今年
久々の県歌で締める年忘
新雪の並べて眩しき山河かな

千葉

岡本 秀子

須田 千代

木村 美翠

禅堂へ続く回廊冬日溜め

大瀬戸の潮に溶けゆく冬日かな

冬濤の記憶しまひし舟簞笥

堅炭の白き火花や干物売

* 朔風や藍色深む能登の海

* 鰯起し五感揺さぶる日本海

水鳥の乱舞してをり漁舟

産土の年酒酌み交ふ三世代

大いなる詩情を永久に宝船

* 凍滝の刃のやうな威光かな

* トルソーのごとく伐られて大枯木

大樗 枯れて昂と交信中

宇治の菓子と紙に透きをり年始

リハビリの五指を拡げる冬日かな

「またあした」と話の終る霜夜かな

茨城

榎本 秀治

千葉

西村 渾

清部 祥子